

# 萌芽期の話劇と上海の学校とのかかわり

板谷俊生

(外国語学部)

キーワード

上海の教会学校、聖約翰書院、南洋公学、李叔同、盛宣懷

0. はじめに
1. 李叔同の略歴
2. 南洋公学
3. 上海の教会学校
4. 聖約翰書院
5. おわりに

## 0. はじめに

中国の新劇は話劇という名称である。京劇は北京オペラといわれるように、主に歌唱でストーリーを展開していく劇であるのに対して、話劇は文字通り、歌唱を伴わず、主に対話でストーリーを展開していく。

話劇の歴史は一般には、1907年に清国留学生在東京で結成した劇団「春柳社」の旗揚げ公演からスタートするといわれている。今年がちょうど劇団「春柳社」が誕生して百周年の年に当たる。そしてそれは中国話劇の誕生百周年であるともいえる。

劇団「春柳社」の代表者のひとりに李叔同という留学生在がいた。当時、彼は東京美術学校西洋画科の学生であった。李叔同は天津生まれで、中国話劇の生みの親といえる人物である。東京に留学する前は彼は上海の学校に在学していた。その頃の上海は学校演劇に火がついた時期、話劇の萌芽が生まれようとしていた時期であった。

李叔同とはどのような人物なのか。彼が在籍した上海の学校とはどのような学校なのか。拙論では、李叔同が東京に留学する前の上海の学校の状況や教育事情について検証してみるこ

とする。

## 1. 李叔同の略歴

### 1.1 多種多芸の李叔同—天津から上海へ

1880年10月23日、李叔同は天津で塩業と金融業を営む裕福な家庭に生まれた。父は李世珍といい、吏部主事を務めたことのある進士であった。

李叔同は幼名を成溪といい、学名を文濤、字を叔同と言った。72歳で父は病没するが、そのとき李叔同はわずか5歳であった。父の死後、家業は日増しに衰退し、妾腹であった李叔同はさらに経済的には恵まれた環境にはなかった。

聡明であった李叔同は科挙の試験に必ずべく受験勉強に余念がない中、17歳の頃に京劇愛好家の仲間入りをし、孫処、楊小楼、劉永奎等京劇の名優たちとも交流を持つようになる。翌年は母の勧めで結婚し、天津県学にも合格するという素晴らしい年となった。

1898年、李叔同は母を伴い、上海のフランス租界に移り住む。間もなく、詩詞文章に切磋琢磨する文芸団体城南文社に参加した彼は天津時代の学問を活かし、めきめき頭角を現し、城南草堂主人の許幻園の知己を得て、翌年には城南草堂に家族共々転居した。袁希濂、許幻園、蔡小香、張小楼と‘金蘭之誼’を結び、‘天涯五友’と称された。さらに詩詞文章だけでなく、書画篆刻にも才能を開花させ、翌年には上海書画公会という組織を立ち上げるほどのリーダーシップと豊かな才能を持ち合わせた青年であった。

1900年、義和団事件が勃発し、八カ国連合軍が北京に入城し、辛丑条約が締結された1901年に李叔同は南洋公学特班に入学し、蔡元培に教えを受けることになる。しかし彼は南洋公学に在籍したまま、1902年に郷試の試験を受けている。南洋公学は新式学校であり、李叔同にしてみれば、創設したばかりの新式学校では将来が不安であったのであろう。そこでかれは科挙を受験したと考えられる。しかし結果は不合格となり、結局南洋公学に舞い戻ることになった。ここから、当時の彼の思想の限界を感じ取れるであろう。その限界は彼だけでなく、当時の多くの青年たちの思想的限界でもあったと思われる。つまり、新式学校は当時はまだ社会的には認知されていなかったともいえるのである。

1901年～1905年、すなわち李叔同が上海の南洋公学に入學し、日本に留学するまでの間、李叔同は演劇活動を開始し、実際舞台に立っていた。1906年、東京で春柳社を結成し、翌年、中国話劇の始まりといわれている『アンクル・トムの小屋』上演の前に、かれはすでに上海で演劇活動を実践していたのである。

1899年冬、上海梵王渡の聖約翰書院でイエス聖誕祭が行われ、在學生が外国語でヨーロッパの物語を上演し、さらに中国語による中国の“時裝戲”が演じられ、學生たちはこの學生演劇

に大いに興味を持ったのであった。そして聖約翰書院のこの演劇が導火線となり、南洋公学、徐匯公学での学生演劇に火をつけた。南洋公学では1900年に「六君子」「義和団」が上演されていた。

『上海近代教育史』によれば徐匯公学とは読経班が発展してできた学校であるという。<sup>1</sup>読経班とは「聖經」—聖書を読むクラス、すなわち教会が中国人信者に識字教育をかねて「聖經」—聖書を読みながら文字を教える学校のことである。

1849年、長雨の影響で災害が発生し、とくに多数の子供たちが難民となった。徐家匯のフランス天主堂耶蘇会のイタリア人神父 Angelo Zottoli が光啓社内で読経班を開いた。収容された難民の12人の子供たちに衣食住が与えられた。翌1850年、難民の子供は31人になったので読経班を発展解消し、徐匯公学を創設した。1862年、耶蘇会は初学院を創設し徐匯公学の学生11人を修道者として入会させた。その中には復旦大学の創設者馬相伯が含まれていた。1911年辛亥革命後は徐匯中小学校となり、31年には学校理事会が発足し、徐匯公学から私立徐匯中学に校名変更した。1953年上海市人民政府が接收し、校名は上海市徐匯中学となった。学校管理面では非常に厳しいということで定評があった。

李叔同が南洋公学入学後、日本留学までの間に学校演劇の早期話劇の舞台に立ったかどうかは管見する限り、不明である。ただ少なくとも2本の京劇には出演していたという記録が残っている。ひとつは『虬蟻廟』（別名『捉拿費徳恭』）、もうひとつは『白水灘』（別名『捉拿青面虎』）という捕り物である。1904年のことである。

1903年、李叔同は聖約翰書院国文教授になるが、まもなく辞職している。1905年、母が病気で亡くなると、彼は家族共々船で天津に帰り、母を埋葬する。そしてその年の秋に留学のため日本に渡る。

## 1.2 李叔同—日本留学と春柳社

李叔同は1906年秋、東京美術学校西洋画科に入学する。李叔同の入学の前年に黄輔周という学生が東京美術学校に第1号中国人留学生として入学している。<sup>2</sup>中国から最初に日本に送られてきた留学生は13人。明治29年のことであった。中国同盟会が結成された1905年（明治38）にはその数1万人以上といわれている。

さて、1906年冬、李叔同は同じく東京美術学校留学生の曾孝谷とともに劇団「春柳社」を結成するのである。翌07年2月、春柳社は駿河台の中華青年会において第1回公演を行った。この公演は前年の秋、江蘇省の罹災民のための義捐活動の一環として行われた。出し物はフランスの劇作家小デュマの『椿姫』（『茶花女』）。中国では1899年、当代屈指の美文家として知られ

ていた林紘によって『巴黎茶花女遺事』というタイトルで翻訳出版されていた。

劇団「春柳社」の顧問には新派劇の藤沢浅次郎が当たった。藤沢は京都生まれで、商人や雑誌記者等の職を転々とした末、オッペケペ節で有名な川上音二郎一座の二枚目役者、女形兼座付き作家となった人であった。春柳社の初公演は新派の大物を後ろ盾に、素人劇団とはいえ、堂々たる旗揚げであった。

演劇における日本と中国の因縁浅からぬ関係をこれは物語っている。中国の初期話劇は新派劇の影響が色濃く反映されていたということになる。

では、当時の中国人留学生はなぜ新派劇の影響を受けたのか。なぜ歌舞伎や新劇ではなかったのか。

当時、東京では全盛期を迎えた新派のほかに、坪内逍遙が文芸協会を創立し、シェイクスピアやイプセンを上演しており、また歌舞伎も根強い人気があり、さらにヨーロッパから帰国した市川左団次の革新的な『ベニスの商人』も上演されていた頃である。では、なぜ新派劇なのか。中国人留学生にとって歌舞伎は内容が古すぎて、そして文芸協会は西欧物であって、日本の当時の日常生活を反映していないということが大きな理由であろうと考えられる。川上音二郎や藤沢浅次郎の初期新派劇は政治的な内容が多い反面、それに続く伊井蓉峰、喜多村緑郎、河合武雄は新派を政治意識から切り離し、芸術性の高い演劇にまで引き上げたと評価されている。留学生にとって新派劇は当時の日本の社会、日本人の日常生活を舞台の上で表現してくれる劇、日本人の家庭内の出来事が簡単に垣間見ることのできる劇だったと考えられる。

第2回公演は1907年6月であった。演目はストー夫人の『黒奴顛天録』（『アンクル・トムの小屋』）である。舞台は新派劇のメッカ本郷座であった。一般にこの劇の上演が中国話劇の始まりとされている。

1908年、春柳社は常盤木クラブにおいて『生相憐』を上演した。これが李叔同にとって春柳社での最後の演劇となった。彼の遺品については杭州の李叔同記念館に所蔵されている。

1911年3月、東京美術学校を卒業した李叔同は帰国し、天津直隸模範工業学堂の絵画教師になる。卒業制作として彼は自画像を制作している。筆者は以前福岡現代アジア美術館で彼の自画像に接する機会があった。

1912年春、上海に出て、城東女学の教師となり、文学と音楽の授業を担当する。

城東女学とは1903年、上海県人楊士照が小南門外に創設した高等小学と初等小学を有する女学校であり、1908年には芸術科が開設された。

李叔同はまた南社に参加し、『南社通訊録』の表紙のデザインと題字をデザインするなど才能を発揮する。また在職中、中国で初めての新聞広告画を制作する。

翌1913年、上海を離れ浙江省立第一師範学校に赴任するまで、彼は上海で柳亜子や蘇曼殊等

の文人と交流する。

## 2. 南洋公学

### 2.1 維新时期の南洋公学と盛宣懷

1894年の甲午戦争で敗北した清朝は翌年馬関条約を結ぶ。そして民族の危機存亡を訴える声が空前の高まりを見せる。その声は日増しに大きくなり、維新变法運動を巻き起こすことになる。上海に新思想を持った知識分子たちが集結し、彼らは学会を起し、新聞を発行し、維新の思想を大いに宣伝する。また教育にも力を注ぎ、学校を設立し、西洋の学問を提唱し、新思想を持った有為な人材を養成しようとした。

南洋公学はそのような時代の要請の下に誕生したといえる。

上海交通大学の前身である南洋公学は洋務派官僚、実業家の盛宣懷の発起により1897年に創設された学校である。

盛宣懷（1844—1916）は清末の官僚、企業家である。江蘇省武進の出身。字は杏蓀、愚斎と号した。彼は李鴻章のもとで経済官僚として、船舶、電報、鉄道、紡績、銀行などの分野で辣腕を振るい、輪船招商局や上海電報局の総裁を勤めた人物である。李鴻章亡き後の軍事面の後継者は袁世凱であるが、経済面の後継者は盛宣懷であった。

1896年、盛宣懷は天津海関道に任命され、上海に長期駐在し、さらに鉄道会社の総裁を引き継いだ。

経済・経営分野で辣腕を振っていた盛宣懷は、中国が科学技術の面で遅れていること、その方面の人材不足を痛感し、人材育成が急務であることを認識し、1895年天津に中国人自らが経営する初めての高等教育機関天津中西学堂を創設する。さらに、2年後の1897年に上海徐家匯に南洋公学を創設した。

南洋公学は、師範院、外院、中院、上院の四院を有する学校であった。外院とは小学校に相当し、中院は中学・高校に相当し、上院は大学に相当する。盛宣懷自ら総裁になり、校長には何嗣焜を招聘し、事務局長にはアメリカ人John Calvin Fergusonを招いた。

南洋公学は創立当初は師範院しかなく、学生募集人員は40人であった。新式教育を普及させ、新思想を有する有為な人材養成が急務であったため、そしてそのためには教師を養成しなければならないため、南洋公学はまずは師範教育から始まった。したがって、20歳から35歳までを募集の対象とした。学費は無料であり、逆に食費代や奨学金が支給された。

1897年秋には外院が10歳から18歳までの学生120名を募集して開学した。さらに1898年には中院が開設され、1901年には上院が開設された。

また、1898年には張元済を招聘し訳書院が開設され、西洋の軍事、政治、法律関係の書籍が

翻訳され、中国内における西洋の思想の宣伝に大きな作用を引き起こした。嚴復訳『国富論』もこの訳書院から初めて出版された。さらにこの訳書院には日本語専修の学校東文学堂も付設（1901年）された。盛宣懷は師範院から章宗祥、雷奮および中院からは楊廷棟等6人を選抜し、南洋公学の最初の留学生として日本に派遣した。

1900年には鉄道クラスが開設され、翌1901年には国家の将来のリーダーの養成目的のため特別クラスが開設された。翰林院編修の蔡元培が招聘され、彼の教育指導の下、教育者で職業教育運動の提唱者の黄炎培など後のリーダーを輩出した。そしてこの中に李叔同もいたのである。1905年、盛宣懷は第一線から身を引いた。

## 2.2 南洋公学と愛国学社

南洋公学は中国初の中国人によって創設され、経営された学校である。洋務派の盛宣懷によって創設された学校であるにもかかわらず、非常に厳しい学校規則が学生の行動を制限していた。学生の集会や政治談議、新思想が盛り込まれた書籍・新聞等の閲読、これらはすべて厳禁という状況であった。そして、そのような状況下で事件は起こった。『上海近代教育史』をもとにその事件を紹介しよう。<sup>3</sup>

1902年10月15日、南洋公学のある学生がインク瓶を教卓の上に置いたことを南洋公学教員の郭鎮瀛に咎められ、退学処分となる事件が発生した。これに対して南洋公学の学生たちは校長に郭鎮瀛教員の退職処分を要求したが、校長は逆にこれらの学生たちを除籍処分にした。10月17日、教師の蔡元培の指導の下、激怒した200人以上の学生たちは南洋公学からの退学を宣言し、処分に対する抗議の意思を示した。事態収拾のため、中国教育会が仲裁し、12月14日南洋公学学生を主体とする愛国学社が泥城橋福源里に誕生する。校長に蔡元培、学監に呉稚暉、教員には章太炎等、進歩的人士を揃えた。学費は不徴収で尋常と高等の2クラス体制で、主に精神教育と軍事教育に力を注いだ。新しい授業内容であったため、教師学生共々政治に関心を抱き、集会を開いたりした。しかし、そのような校風が原因で1903年7月、愛国学社は政府によって封鎖されることになる。

## 3. 上海の教会学校－アヘン戦争前後から五四新文化運動以前

アヘン戦争以前は布教が主であったため、学校として当然備えておかなければならない設備等の条件の整っていない教会が布教活動の初期においては一般的であった。ただ、布教活動を推し進めていくプロセスの中で教会内に読経班や識字班が付設されていき、規模・内容が拡充されていき、教会学校の誕生となっていくと思われる。

1839年、アヘン戦争の前年、フランス天主教教会が上海漕宝路に読経班を開設する。読経とは「聖經」を読む、すなわち聖書を読むということである。当時文盲が多く、布教のためには識字率を上げて、聖書の内容を理解してもらう必要があった。布教上の必要から教会学校は誕生したともいえる。

読経班としてはその他に、1849年創設のフランス天主教教会の読経班（翌50年には読経班を発展解消して中等教育機関としての徐匯公学となる）、1851年創設のフランス天主教徐家匯の読経班等がある。

初等教育としての天主教教会学校は1851年のフランス天主教暁星堂の創設になる暁星小学が上海では最も早く開学しており、基督教教会学校では1850年の英国基督教聖公会創設の英華学塾または1851年のアメリカ基督教聖公会創設の裨文小学が早期のものであると思われる。

中等教育における天主教教会学校としては、1850年のフランス天主教耶蘇会創設の徐匯公学や1853年のフランス天主教天主堂創設の民徳女校等が早い時期のものである。基督教教会学校としては、1847年アメリカ基督教懷恩堂創設の懷恩中学や1850年のアメリカ基督教聖公会創設の裨文女校等が早期のものであろう。

また高等教育における天主教教会学校としては、1902年の馬相伯創設の耶蘇会教会震旦学院が最も早く、基督教教会学校としては1874年の英国伝教師傳蘭雅創設の格致書院や1879年の米国基督教聖公会創設の聖約翰書院（1865年創設の培雅書院と1866年創設の度恩書院が合併してできた学校）等が早期のものとなっている。<sup>4</sup>

1840年のアヘン戦争から1900年の義和団までの約40年間のうちに、上海における教会学校はかなり創設されている。粗末な読経班・識字班から小学校に発展解消され、そして大学まで有する教会学校が創設されたということがこの期間の特徴として先ず挙げられる。しかも急速に発展したという感じは否めない。その急速に発展した原因としては中国とイギリス、フランス、アメリカ等の列強との間のいろいろな不平等条約が関係していると考えられる。1842年の南京条約、1844年の黄埔条約、1860年の北京条約等の不平等条約により、教会学校は急速に発展できたのではないか。

さらに各国の各教会が個々に学校運営する体制から協力できるところは協力する体制へ、つまり分散から連合する体制に変わったといえる。たとえば1877年、上海で基督教伝教師大会が開催された。これなども連合、統一步調をとりながら共存共栄を図ろうとする表れであろう。その大会の発起人の一人であるC.W.Mateerを中心に基督教学校教科書編纂委員会が結成された。このような動きも教会学校が急速に発展した原因のひとつといえるのではないだろうか。

つぎに、当時の教会学校の目的とはなんなのか。上海にこれだけ多くの教会学校が短期間に開設された目的とはいかなるものか。純粋に識字教育のためか。単なる教養教育のためなのか。

教会学校の究極の目的は識字教育のためや教養教育のためなどでは決していないであろう。当時の教会学校は布教機構のひとつである。基督教という宗教事業を推進するためのものであったろう。1人2人の中国人をキリスト教信者に仕立て上げるのではなく、全中国をキリスト教化された国にすることであったであろう。

『上海近代教育史』は、教会の仕事と軍隊の任務を比較して、軍隊の目的は可能なかぎり多数の敵を殺傷あるいは捕虜とするだけでなく、かれらを征服することであり、そして教会の目的も単なるできるだけ多数の人を信者にすることだけでなく国家すべてをキリスト教化することである、という1877年の在華基督教伝教士大会の席上でのC.W.Mateerの発言を紹介している。<sup>5</sup>

#### 4. 聖約翰書院

##### 4.1 聖約翰書院の略歴

1899年冬の聖約翰書院での外国語による対話劇が中国話劇の萌芽であるといわれている。近代になって京劇等伝統劇以外の演劇が始まった瞬間であった。聖約翰書院の学生演劇がほかの学校に飛び火し、南洋公学、民立中学、徐匯公学などでもその後すぐに学生による演劇が行われた。南洋公学では1900年に「六君子」「義和団」が上演されていた。

つぎに、学校演劇の火付け役となった聖約翰書院について『上海近代教育史』を中心にまとめておこう。<sup>6</sup>

聖約翰書院は米国基督教聖公会の経営する学校である。1879年に梵王渡路に創設された。当時、梵王渡路に創設されたので梵王渡大学とも呼ばれた。1905年に聖約翰大学に校名変更した。

1859年、聖公会はJoseph Schereschewskyを主教として中国上海に派遣した。彼はロシア系ユダヤ人で、アメリカで生まれ育った。彼は1865年に培雅書院という大学を創設し、さらに翌66年には度恩書院を創設した。そして1879年にこのふたつの大学を合併し、聖約翰書院を創設したのである。Joseph Schereschewsky主教は聖公会会長顔永京と共同で校務を取り仕切り、Joseph Schereschewskyは自ら校長になり、顔永京を学監に任命した。1880年、Joseph Schereschewskyは武昌に赴任したため、聖約翰書院の校務は教区委員会に任せることになったが、翌81年に彼は体を壊したため聖約翰書院の仕事を一切辞し、文惠廉に校務を任せることになった。1886年アメリカ人宣教師Hawks Pottが上海に派遣された。聖約翰書院の英語教師となっていたHawks Pottは1888年、文惠廉の後を継ぎ、聖約翰書院の校長となる。その在職期間は1942年までの54年の長きにわたった。したがって、李叔堂が赴任したときはこのPott校長だったことになる。

聖約翰書院は創立当初は神学と国文の2学部しかなく、神学教育に教育の重心があるのはもちろんで、国文は中学高校程度であった。1880年には医学部を創設し、翌81年には英文学部を創設した。どちらにも正科と予科を設置した。1899年までの20年間に聖約翰書院を卒業した学生数は69人であったというから、学校としては小規模の学校であったことがわかる。1905年に聖約翰大学に校名変更し、翌06年には国文学部を廃止し、神学、文理、医学の3学部とした。また同年、米国コロンビア州大学条例が改組され、聖約翰大学卒業生は直接アメリカの大学院に入学でき、学位まで取得できるようになり、義和団事件後、聖約翰大学は人気大学となり、飛躍的に発展した。

休校となったのは計2回である。1900年、義和団運動の影響によって聖約翰書院は9ヶ月間休校となる。もう1回は1927年の北伐戦争時、北伐軍が南京を攻撃し、それに対して英、米、仏らが上海に兵力増強したときである。しかし同年6月には大学は再開した。

1942年、Pottは引退し、名誉校長となり、北伐戦争時に聖約翰大学教務主任兼副校長代理として活躍した沈嗣良が校長に就任し、Pottの息子のJames Pottが教務長に就任した。日中戦争終結後は沈嗣良は漢奸として投獄され、1951年聖約翰大学は中国政府に接收管理されることになった。

#### 4.2 李叔同と聖約翰書院

李叔同は1901年秋に南洋公学特班に入学し、蔡元培の教えを受けたことがある。『李叔同伝』の年譜によれば、1903年、李叔同は聖約翰書院の国文教授に就任している。まもなくこの職を辞している、とも書かれている。在職期間は分からないが、就職はしていたようである。李叔同が赴任したときはこのHawks Pott校長だったことになる。日本に留学するのが1905年秋のことであるから、これは日本留学2年前のことということになる。なにが原因で辞職したのか現時点では不明であるが、興味深いデータをつぎに紹介しよう。

『上海近代教育史』によれば、教会学校の特徴にはいくつかの点が挙げられる。<sup>7</sup>

まず、授業科目の中で最も重視しているのが宗教の授業および宗教活動であること。第2に国文の授業も勿論あるが、最も重視しているのが英語やフランス語等の外国語であること。第3に教会は女子教育を提唱してはいたが、教会学校では男子校、女子校と区別するのが普通であったこと。第4に管理が厳しく、学生の個性は重視していないこと。第5に学生の校外での社会活動参加を厳しく制限したこと。そして第6に中国人教師と外国人教師の待遇差別が大きかったこと、である。

この第6の中国人教師と外国人教師の待遇差別について聖約翰書院のケースをつぎにまとめてみることにする。

まず給与についてみると、アメリカ人宣教師で既婚の教師の場合、その年収は4000米ドル、同じくアメリカ人宣教師で未婚の教師の場合、その年収は2000米ドルである。

これに対して、中国人で一般教師の場合はその月収が130元が1人、110元が1人、80元が2人、70元が2人、60元が1人となっていて、最高額が130元で、最低額が60元である。中国人で一般教師の場合の月平均給与は86元となっている。

さらに、中国人教師の給与にも2種類あり、中国人で中国語教師の場合、その月収は60元が2人、40元が4人、30元が7人、20元が1人となっており、月平均給与はわずか36元である。

中国人で一般教師の最低額が中国人で中国語教師の最高額と同額であることが分かる。

つぎに教職員住宅についてみると、聖約翰書院の教職員住宅は1等から3等までの3種類に分類される。

1等住宅はガーデン付きの小さな洋館でアメリカ人宣教師が居住する。

2等住宅はアメリカ人宣教師の信任厚い中国人教職員住宅である。

3等住宅は水も電気もない粗末な部屋で、アメリカ人宣教師から蔑視されている中国人教師の住宅となっている。

## 5. おわりに

話劇の先駆といわれる劇団「春柳社」を留学先の東京で創立した李叔同が生まれ育った天津から上海に移り住んだ頃の上海のいくつかの学校の状況や教育事情についてみてきた。

南洋公学についていえば、李鴻章の経済官僚盛宣懐の創設した南洋公学は初めて中国人の手で創設され、経営された学校であったこと、小学校から大学まであり、さらには翻訳や日本語専門学校まで有する学校であった。小中高大学までの一貫教育を通じて国家が必要とする人材育成を早急に系統的に行おうとする教育革命ともいえる一大プロジェクトだったと思われる。さらには創立者が進歩的人士であったにもかかわらず、学生集会や政治談議、新思想の書籍・新聞の閲読などはすべて厳禁という学校規則であったということ、しかしそれにもかかわらず、初期話劇が学校演劇として南洋公学で上演されたということ等が理解できた。

聖約翰書院についていえば、初期の主な教会学校は読経班から出発し発展したこと、教会学校はアヘン戦争から義和団事件の間に急増したこと、教会学校の創立目的、外国人教師と中国人教師の給与等に大きな差別が厳然と存在していたこと等が理解できたが、今後も引き続き上海の教会学校について調査していきたいと思っている。

**注**

- (1) 『上海近代教育史』 564頁
- (2) 『李叔同図伝』 32頁
- (3) 『上海近代教育史』 157-158頁
- (4) 『上海近代教育史』 542-553頁
- (5) 『上海近代教育史』 537頁
- (6) 『上海近代教育史』 567-571頁
- (7) 『上海近代教育史』 539-540頁

**主要参考文献**

- 陳科美主編『上海近代教育史』 上海世紀出版集團 上海教育出版社 2003年12月
- 陳星著『李叔同図伝』 湖北人民出版社 2005年1月
- 瀬戸宏著『中国話劇成立史研究』 東方書店 2005年2月
- 天児慧他編『岩波現代中国事典』 岩波書店 1999年5月